

|             |          |
|-------------|----------|
| 群<br>教<br>セ | F03 - 03 |
|             | 平17.231集 |

# 「ほっとルーム」を拠点とした 温かな学校風土づくりを目指して

——生徒指導委員会を中核とした組織の活性化を通して——

特別研修員 丹羽 悦子（桐生市立南小学校）

## 《 研究の概要 》

本研究は、全校児童が明るく楽しく生き生きとした学校生活を送るための温かな学校風土づくりを目指したものである。そのために、生徒指導委員会を中核とした組織の活性化を図るためのコーディネーターとしての在り方を問うものである。生徒指導部員が「ほっとルームメンバー」として、「ほっとルーム」を拠点に、各学級、各分掌において様々な人間関係づくり等の実践を展開していけるようなコーディネートを試みたものである。

**キーワード** 【教育相談 コーディネーター 教職員研修 ほっとルーム ピア・サポート SGE】

### I 主題設定の理由

本校は、市のほぼ中央に位置しており、全校児童275名の中規模校である。4月当初、本校における不登校児童はいない。しかし、チックや無気力、情緒不安定など何らかの心のサインを出している児童が各学年2、3名は見られる。また、児童の多くは、毎日の生活の中で友達とトラブルを起こしたり、些細なことで傷ついたりしている。担任に相談する場合もあるが、保健室や図書室、特殊学級に行き、不安や悩みを相談することもある。こうした心のサインをもつ児童や日常起こりうる心の負担への対応は、学級担任や養護教諭など、担当者が負うことが多く、不定期に開催される生徒指導部会では、様子の報告で終わることが多いという実情である。

また、前年度、全校児童を対象に行った生活実態調査では、就寝時刻が遅い、朝食をとらずに登校するなど、生活習慣の改善が必要とされる児童が多いことが分かった。そこで、学校便りや懇談会の際に保護者への協力を呼びかけた。ところが、両親共に仕事を持つ家庭が増えている中、懇談会の出席率もそれほど高くはなく、学校からの情報発信が各家庭に十分浸透しているとはいえない状況である。

以上のような実態から、児童が出している心のサインや日常起こりうる心の負担が解消されれば、一人一人の児童が、明るく楽しい学校生活を送ることができると考えた。また、そうなれば、一人一人のもっている力を十分発揮しきれるであ

ろう。このことは、心のサインを出している児童はもとより全校児童に求められることである。そのためには、児童の置かれている環境を整えていくことが大切であり、各家庭や地域の協力を得ることが重要となる。また、心のサインをもつ児童に対して、学校全体で問題解決が図れるような組織的支援体制づくりを進める必要がある。同時に、どの児童にとっても学校が、学習や行動上の成長の場としてよりよいものでなければならない。そこで、全児童対象に予防、開発的な働きかけをすることが有効であると考えた。

以上のことから、「ほっとルーム」を拠点とした温かな学校風土づくりを目指すこととした。そのために、生徒指導部会を中核とし、学校全体が温かな関係で結ばれていくように、コーディネーターとして、児童、家庭、地域に働きかけをしていきたいと考え、本主題を設定した。

### II 研究のねらい

生徒指導委員会の各部員が「ほっとルームメンバー」となり、児童、家庭、地域に働きかけをし、その取組を校内研修において広めることにより、教職員全体で温かな学校風土づくりを目指せるようなコーディネートの在り方を明らかにする。

### III 研究の見通し

コーディネーターとして、本校における実態を捉え、働きかけの手順を示しながら見通しを立てることとする。

### 第一段階（自学級・自学年での展開）

- ・モデル学級で、学級の実態に即した構成的グループ・エンカウンターを行えば、児童同士の相互理解が深まり、温かい学級風土を築くことができ、校内のモデルになるであろう。
- ・モデル学年で、子育て支援セミナーを行えば、保護者間の人間関係の輪が広がったり、親子関係について見直す機会となったり、情報を発信したりできるであろう。

### 第二段階（保護者、地域にかかわるメンバーへの働きかけ）

- ・「ほっとルームメンバー」の養護教諭や生活相談員（＝主任児童委員）に働きかけをすれば、生活習慣にかかわる学校保健委員会や「ほっと教室」を開催することができるであろう。

### 第三段階（関心を高めるための研修会の設定）

- ・教職員研修で、モデル学級・学年、学校保健委員会、「ほっと教室」の取組を紹介すれば、温かな学校風土づくりに向けての関心を高めることができるであろう。

### 第四段階（各学級、各分掌における実践を進めるためのメンバーへの働きかけ）

- ・「ほっとルームメンバー」である児童会担当者や縦割り班の班長、副班長を対象にピア・サポート活動を行えば、児童相互の助け合いの輪が広がるであろう。

- ・「ほっとルームメンバー」に働きかけをすれば、各学級、各分掌で道徳やSGEなどの実践に取り組むことができるであろう。

### 第五段階（協働意識を高めるための研修会の設定）

- ・教職員研修の場で各メンバーの取組を紹介すれば、全教職員の協働意識を高めることができ、学校全体として温かい学校風土づくりに取り組んでいくことができるであろう。

## IV 研究の内容

### 1 基本的な考え方

#### (1) 本校の「ほっとルーム」について

生徒指導委員会を毎月定期的に開催し、「ほっとルーム」の企画運営委員として原案をもとに立案する。職員会議で承認を得て「ほっとルーム」を開設する。そこを拠点に様々な活動ができるよう次の機能をもたせる。①児童だれもが心の拠り所とする場②保護者との連携を深める場③組織的な支援体制を進めていく場④地域との連携を深め

ていく場⑤家庭や教職員に対して情報を発信する場として活用させていく。

#### (2) 「ほっとルーム」の各機能におけるねらいと具体的な取組

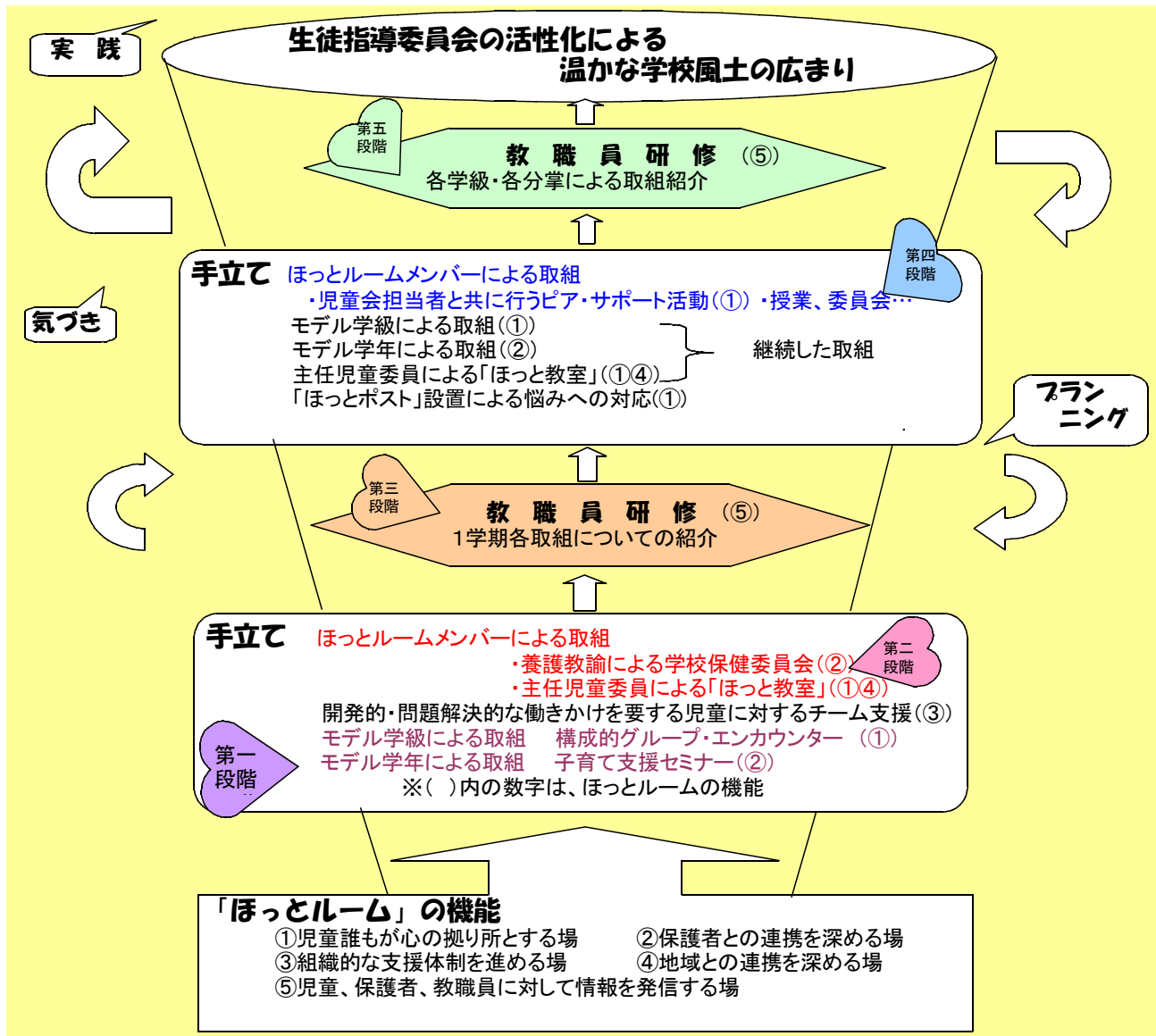
| 機能        | ねらいと具体的な取組   |
|-----------|--|
| ①心の拠り所    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・全校児童の悩みなどに対し、迅速に対応するために、「ほっとルーム」に「ほっとポスト」を設置する。</li> <li>・児童の情緒の安定を図るため、「ほっと教室」を開催する。</li> <li>・全校児童が、温かい人間関係で結ばれるよう、ピア・サポート活動の拠点とする。</li> </ul> |
| ②保護者との連携  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の健全育成につながる取組を行うため、生活習慣にかかわる学校保健委員会や子育て支援セミナーを開催する。</li> </ul>  |
| ③組織的な支援体制 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・開発的な働きかけや問題解決的な働きかけを要する児童に対して、チーム支援を行う。</li> </ul>   |
| ④地域との連携   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域における児童の活動を見守ってもらうため、生活相談員と連携をとりながら、民生委員（主任児童委員）に協力依頼し、「ほっと教室」を開催する。</li> </ul>   |
| ⑤情報の発信    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・温かい学校風土の取組を紹介するため、児童、保護者、教職員それぞれに対する「ほっとルーム通信」を発行する。</li> <li>・教職員研修を行う。</li> </ul>  |

#### (3) コーディネーターについて

南小学校におけるコーディネーターの在り方について、次のように考えた。

- 立場は、生徒指導主任である。
- 毎月1回、定期的に生徒指導部会を開き、各学年からの連絡報告を中心に、問題の早期発見に努めたり、担任の心の負担を軽減したりする。また、「ほっとルーム」の企画運営に関する原案を立案したり、研修への取組に関する提案などを行ったりしていく。
- 「ほっとルーム」を拠点に様々な活動ができるよう各機能をもたせたが、スムーズに展開できるように、地域や家庭、児童や教職員に対して橋渡し役となり、各取組が充実できるようにしていく。
- 研究の見通しで計画した内容が、円滑に行えるようサポートしていく。
- 研究の実践や取組状況について、情報を発信し、全職員が共有できるようにしていく。

図1 温かな学校風土の広まりについての全体構想図



## V 実践内容と考察

### 1 第一段階

#### (1) モデル学級でのSGEの取組

5年1組は、男子13名、女子9名計22名である。いくつかのグループはあるものの男女とも比較的仲がよい。ただ、自分だけ良ければ良いという自己中心的な考えをもつ児童がいたり、6月に学級の雰囲気質問紙を行ったところ、公平感、教師との関係、学級の不和について若干心配な数値が見られた。そのため、構成的グループ・エンカウンターを計画的に行うことで、温かな触れ合いと思いやることのできる人間関係を築いていくことにした。計画は、右のとおりである。

また、モデル学級として教職員研修において紹介をしていくことで、SGEを広めたいと考えた。

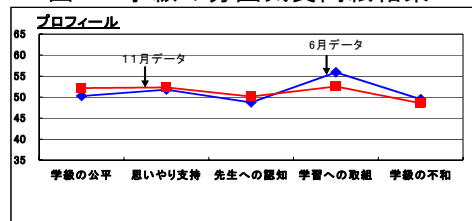
|      |   |
|------|---|
| 1 学期 | 誕生日チェーン、あいさつゲーム、いっしょに楽しく、四つの窓                             |
| 2 学期 | 先生を知るイエス・ノークイズ、トラスト・ウォーク、ふわふわ言葉とチクチク言葉、サイコロ・トーキング、自分への手紙、 |
| 3 学期 | いいところさがし、Xからの手紙、自分のしたいことベスト10、別れの花束                       |

〈考察〉

11月に学級の雰囲気質問紙を行ったところ学習への

取組は下がったが、全体的に良い傾向となった。

図2 学級の雰囲気質問紙結果



シェアリングは、ワークシートに記入してから行ったが、自分を振り返る時の静けさが、そのエクササイズの真剣な取組を表していた。

エクササイズの振り返りより

【X先生を知るイエス・ノークイズ】

・先生の将来の夢とか予想外だったからびっくりした。知らないことがあったから先生のことがよくわかって良かったと思った。楽しかったからまたやりたい。

【トラストウォーク】

・人を信用していないと、すごく怖いことがわかった。声を出さずに誘導するのが大変だった。

【サイコロ・トーキング】

・ふだんは、困っていることを話さないけど、心の中では、困っているんだなと思った。

課題としては、年間計画を立てたが「X先生を知るイエス・ノークイズ」は、年度初めに、また「ふわふわ言葉とチクチク言葉」は、1学期の学級集団としてのまとまりができる前に行くとより効果があると感じた。児童の実態に応じて計画を組み直していく必要があることが分かった。

教職員研修でモデル学級としての取組を紹介したことで、SGEを広めることには効果があった。ただ、各実践ごとに紹介した方が、すぐ対応したい学級にとっては有効であった。

## (2) モデル学年による子育て支援セミナー

1、2学期の授業参観後、5年生の保護者を対象に、子育て支援セミナーを行った。1学期のテーマは、「やるべきことに進んで取り組む」、2学期は「子どもとのかかわり10の秘訣」であった。

1学期に出席した保護者から「話しやすく、他の家庭の様子についてもよく分かるので、今後も続けてほしい」という要望が多く寄せられた。セミナー参加者のある保護者から、後日「子どもと話し合いの場を設け、子どものやる気がでてよかった」という便りが届いた。2学期のセミナーでは「1回目と違って、今回も内容が濃いセミナーだった。・・・これから子どもも大きくなっていくが、父親と協力しながら子育てをしていこうと思う」という感想が寄せられた。

〈考察〉モデル学年ということで、教職員研修において、懇談会のもち方の例示ができた。また、「ほっとルーム通信」で、取組の様子を全校の家庭に配布した。PTAの実行委員会でも話題となり、全校の保護者を対象に実践できると、児童のおかれている環境を整えていくために効果的であると感じた。

## 2 第二段階

### (1) 養護教諭による学校保健委員会

生活習慣の改善に向けて保護者に対して講話する。児童の就寝時刻、起床時刻、朝食摂取状況など調査し実態を伝え、睡眠の重要性について独自にまとめた資料を基に行う。

〈考察〉児童の生活習慣を見直すきっかけとなった。また、教職員研修においても実態を伝え、学級指導に役立てることができた。

### (2) 主任児童委員による「ほっと教室」

本校の生活相談員は、地域の民生委員（主任児童委員）であることから、地域との連携窓口となり、「ほっと教室」を開催した。最初に、夏休み中、前半と後半2回行った。延べ84名の参加があり、「ほっとルーム」の壁面を不思議な森のイメージにするため思い思いに絵を描いた。アンケートを実施したところ、全員が「楽しかった。また来たい」という意見であった。その結果、主任児童委員を中心に毎学期ごと、数回開催することとなり、2学期は、11月と12月に開催し、しおり作りやクリスマスカード作りを行った。

〈考察〉児童の描いた絵を壁面に貼ったため、「ほっとルーム」が温かい雰囲気となった。地域の方と接点をもてたことは、休日など地域で過ごす子どもたちの様子を見てもらえることにもなり、連携をしたことの効果はあった。また、「ほっとルーム」で、このような活動することは、児童にとって心安らぐ場となり効果があった。

## 3 第三段階

### (1) 教職員研修について

夏休み中に、第一、第二段階の取組について紹介をする研修を行った。資料やビデオを利用し、また、簡単なエンカウンターも取り入れた。

研修会では、2学期に行うピア・サポート活動についても説明し、縦割り活動の班長、副班長の様子を見守っていくことの理解を得た。

〈考察〉研修終了後、アンケートを実施し、各学級、各分掌で温かい学校風土づくりで取り組みそのような内容を記入してもらった。研修会を行い、関心は高まったと考える。以下が、主な内容である。

・一日一善運動をしたい。自分のためだけでなく何かをする喜びやしてもらった時のありがたさが伝わればいい。

・図書室から子どもの悩みに答えられる本、心をやすす本、絵本を「ほっとルーム」におけるとよい。

・言葉遣いや友達への意志の伝え方など、場面設定をして、

感じる印象について考える道徳の授業を実施したい。  
 ・トイレ清掃の担当なので、絵や富弘さんの詩などを貼る。

・妙義団で3年生男子が遊園地で泣いていた。その子を囲んで、班長や5、6年生が心配そうに話を聞いてあげていた。どうなるのかなと見ていたが、しばらくすると泣きやみ、みんなで次の行動を開始していた。  
 ・桐生が岡公園への往復時に一年生の手をずっとにぎって歩いていた。特に○さんが手をつないでいた子は、体調不良だったので、手をつないでもらって安心していただろう。□君は、遊園地で乗りもののチケットをなくしてしまった二年生に自分の分を渡して、観覧車に乗せてやった。

#### 4 第四段階

##### (1) 児童会担当者と共にいった

###### ピア・サポート活動

本校の縦割り活動「なかよし団」の班長・副班長を中心にピア・サポーターとなるトレーニングを児童会担当者と2学期はじめに行った。縦割り活動には、運動会、なかよし遠足、なかよし給食、毎週木曜日のなかよし遊びがあるので、困っている子を助けたり思いやりの気持ちをふくらませたりすることで温かい学校風土が広まることをねらいとした。以下、計画である。

| テーマ            | 主な活動内容                         | 活動日          |
|----------------|--------------------------------|--------------|
| リレーショ<br>ンづくり  | ・あいさつゲーム<br>・サポートするってどういうこと    | 9/5          |
| よい関係を<br>つくる   | ・なんでだろうゲーム<br>・トラスト・ウォーク       | 9/6          |
| 上手な聴き<br>方の練習  | ・聞いてもらえる喜び<br>・FELORモデルを身につけよう | 9/7<br>9/8   |
| 心地よい話<br>し方の練習 | ・ふわふわ言葉とチクチク言葉<br>・どういえばいいのかな  | 9/12<br>9/13 |
| トラブルの<br>解決    | ・こんなことが起きたら                    | 9/ 27<br>28  |
| 個人プラン<br>ニング   | ・ピア・サポーターとしての活動を<br>考えよう       | 9/ 29        |
| 実践             | ・なかよし遠足                        | 9/ 30        |

トレーニング後、なかよし遠足があったので、個人プランニングを行い、遠足に臨んだ。遠足で、サポートの実践を行った。後日、振り返りを行い、教職員が見守った様子をもとに、児童へのスーパービジョン（指導助言、賞賛、支持など）を行った。以下、班長・副班長の振り返りと教職員が見守った様子である。

**班長・副班長の振り返りより**  
 ・行き帰りに、低学年と手をつないであげた。安心していった。「この子たちにたよりにされなきゃ」と思った。  
 ・サポートする前は、なんて思われるかなと思っていただけ、声をかける勇気が必要なのかもしれないと思った。  
 ・1年生のけんかをとめた。仲直りしてうれしそうだった。自分も「ホッ」としてうれしかった。  
 ・6年生が2人いるので別々の仕事ができ、班長の仕事も半分になって少し楽になったと思った。私は副班長なので班長をしっかりサポートできてうれしかった。  
**先生方を見守った様子から**

トレーニング後、10月より、困ったことなどがあつたらほっとポストを通じて、班長・副班長に手紙を書いてよいこととした。その手紙を配達したり、「ほっとルーム」に来た下級生と遊んだりするのに「なかよしサポート隊」の結成を呼びかけたところ、18名の児童が希望し、昼休みに活動を行った。一ヵ月後の11月末に一度振り返りを行い、「なかよしサポート隊」の取組について話し合ったところ、全員一致で継続することになった。  
 〈考察〉ピア・サポート活動を行うことで、今まで以上に班長・副班長が、下級生の面倒を見ようという気持ちが高まった。また、縦割り班活動を進める際に自信をもって班をまとめようとする姿が見られるようになった。11月14日から、なかよし月間が始まり、なかよし給食やなかよし遊びを行ったが、意欲的に取り組む姿が見られた。

ピア・サポート活動は「トレーニング→個人プランニング→実践→振り返り→児童へのスーパービジョン」を繰り返すため、12月のなかよし給食の際には、児童会担当者が中心となってトレーニングを行った。橋渡しができたことは、コーディネーターの役割を果たすことができたと考える。

##### (2) 「ほっとルームメンバー」への

###### コーディネートについて

生徒指導委員会で、各学級、各分掌において、温かい学校風土づくりに取り組んでもらう提案をした。了承を得て、2学期中に取り組んでもらった。以下が実践報告である。

| 担当       | 時 間                          | 活 動 内 容  |
|----------|------------------------------|--|
| 1年<br>担任 | 休み時間                         | 友達関係が、温かい関係で結ばれるようTTで見ていく  |
| 2年<br>担任 | 道徳<br>「学びゆ<br>うえんのさ<br>つまいも」 | ・グループ・エンカウンターの手法として「ありがとうカード」の活動を行った。思いやりをもつことがすばらしいことである体験をさせた。 |
|          | エンカウ<br>ンターと学級               | ・「ふわふわ言葉とチクチク言葉」について話し合い、教室に「ふわふわ言葉」                             |

|     |             |                                     |
|-----|-------------|-------------------------------------|
|     | 通信          | を掲示。学級通信で保護者に知らせる。                  |
|     | 帰りの会        | うれしかったことなどを発表し合う。                   |
| 3年  | 帰りの会        | 一日一善運動                              |
| 担任  | 道徳「くうちゃんの絵」 | クラスのためにできることをカードに書き、時間をおいて反省の時間をとる。 |
| 4年  | 総合的な学習      | 福祉体験活動の一環としてトラスト・ウォークを行った。          |
| 6年  | 道徳          | 「相手の気持ちを考えた話し方」で場面設定をし、会話形式で考える。    |
| 清掃  | トイレ掃除       | 温かみのある絵を掲示する。                       |
| 児童会 | 常時活動        | 「ほっとルーム」で友達の良い所を書き、廊下に掲示できるようにしていく。 |

（考察）夏休みに教職員研修を行っていたので、生徒指導委員会で理解を得やすかったように思う。内容については、「ほっとルームメンバー」に任せたので、取り組みやすかったようである。

## 5 第五段階

12月19日に第2回の教職員研修会を開催した。「ほっとルームメンバー」の取組について紹介をした。メンバーの取組は、様々なパターンがあったので、参考になった。実施後、アンケートで3学期に取り組みそうな内容を聞いたところ「広報委員会で、『ほっとルーム特集号』を発行する予定」「登下校時に、上の学年の子が、声をかけて一緒に歩けるような人間関係をつくっていきけるように安全主任として働きかけたい」などの意見があった。これによって、3学期には、全職員による温かい学校風土づくりの取組につなげていければと思った。

〈考察〉研修終了後のアンケート結果では、約8割の教職員が「ピア・サポート活動やほっと教室など、学年という枠を超えた活動は、編み目のような人間関係となり、南小の家族のような温かさにつながっている」というような意見で、温かさの広がりを感じつつあった。しかし、「まだ、初年度で、性急に成果を求めず、計画を実践していくことに価値がある。特色ある教育活動として根付いたときこそ温かい学校風土の広がりが認められるのではないか」という意見もあり、今後の継続した取組が大切であると実感した。

## 6 その他「ほっとルーム」機能にかかわる取組

### (1) 「ほっとポスト」について

児童だれもが、悩みの解消を図れるように「ほっとポスト」を設置した。20分休みや昼休み、自

由に「ほっとルーム」に出入りし、手紙を書いてよいこととした。宛先は、当初、教職員であったが、ピア・サポートトレーニング後は縦割り班の班長・副班長にも広げた。11月は、146通の手紙の投函が見られ、うち48通は、教職員宛であったが、残りは班長・副班長宛やその返事であった。

（考察）手紙を書くことで、小さな悩みの軽減やふだん伝えられない感謝の気持ちを伝えることができている。今後も様子を見ながら、児童の心の拠り所となる「ほっとポスト」にしていきたい。

### (2) 組織的な支援体制としての

#### チーム支援について

円形脱毛症などの事例に関して、担任、養護教諭、生活相談員など放課後に話し合いをし、本人及び家族に働きかけを行うことができた。改善が見られている。

〈考察〉今のところ、大きな問題行動に発展していないので、規模の小さいチーム支援であった。様々な角度から支援することは児童にとって心の拠り所となるので、今後は、チーム支援の規模を広め、より多くの教職員がかかわりをもてるようコーディネートしていきたい。

## VI まとめと今後の課題

本研究は、温かい学校風土づくりを目指して、生徒指導委員会を中核とした組織の活性化を図るために、生徒指導主任がコーディネーターとして働きかけをしたものである。コーディネーターとして、本校の実態を捉え、働きかけを段階的に行い、2回の教職員研修を組み入れた。そのことにより、教職員全体の関心や協働意識を高めることができ、その結果、「ほっとルーム」を拠点に温かさの輪が広げられつつある。コーディネーターの在り方として、生徒指導主任という立場が有効であり、段階的な方法も一定の成果を上げることができたと考える。

今後は、この取組の継続が大切であると実感している。同時に、コーディネートした結果、ピア・サポート活動など実践できる教職員が増えてきたので、さらにその輪が広がるよう努力したい。

（担当指導主事 野村 達之）